

外来系土器の展開に関する一考察

奈良 康正

はじめに

土器はそれ単体では決して動くことはない。必ずその背後には、その土器を日々の生活において使用し、それらを携えたであろう人々の動きを伴った集団同士の接触が存在している。また、土器の移動現象は、社会体制の再編成時における激動期に、より顕著に認められる現象として捉えることができる。稲作という生産経済に基盤をおく弥生社会の成立期における遠賀川式土器の移動^(注1)、階層制社会の一つの完成形態としての古墳社会の成立期における土師器の移動^(注2)、さらには、律令体制の地方への浸透に伴う畿内産土師器の移動^(注3)などはその典型的な例として取り上げることが可能であろう。だが、ここに列挙したものは、その規模(数量的・距離的)において突出していたがためにより強調されることとなったと考えられる。しかし、土器の移動現象は、その総量、及び器種、またその距離において、さまざまなレベル差が認められるものの、いかなる時代においても、またいかなる地域においても普遍的に認められる現象であることが最近の調査により判明している。そうした事柄を踏まえた上で、石野博信氏の「土器の移動は、一つの器種が一個体だけ一つの地域に動く様式からすべての器種が多量に多くの地域に動く様式まで、多くのパターンがある。歴史的意味をもつのは多量多量多地域移動であろうが、少量ではあるが多種多地域移動にも^(注4)注目」しようという言葉も発せられたものと考えられる。しかし、今日における土器の移動に関する研究は、森岡秀人氏も指摘するように「遠隔地相互の資料を綿密にクロスチェックすることにより、土器編年作業それ自体を強固に支える性質を保持しており、その目的のみに活用されるケース^(注5)」が増えているようであるが、そこからさらに一歩進んで移動現象の社会的、文化的、政治的背景の考察にまで踏み込むことを目的とすべきであろう。

1. 土器移動を考えるにあたって

土器移動に関する主だった研究について概観してみたい。

佐原 真氏は、和泉および摂津における中・南河内の土器の在り方に着目し、両地域がほぼ等しい距離にありながら、和泉においては一通りの器種が揃うのに対して、摂津では

壺・鉢などの文様で飾られた器種のみに限られるという移動形態の差異を指摘している。そして、前者には土器を携えた人々の移動を、後者に対しては土器自身を求めた結果か、もしくは、それを容器とした生産物の交易をそれぞれ想定し、こうした差異は河内と両地域の関係の緊密さの度合いによるものとした^(注6)。また、東山遺跡の調査に際しては、土器様式の捉え方の一例として、「集落土器様式」を挙げ、^(注7)

A類型—その集落で製作された土器のみによって成り立っている場合

B類型—それと外来の土器との両者によって成り立っている場合

C類型—すべて外来土器によって成り立っている場合

の3類型を設定したが、この視点は土器移動を考える際には重要である。

都出比呂志氏は、生駒山西麓産の胎土の土器に着目し、これらが畿内一円に運ばれていること、なかでも、弥生中期中葉(第Ⅲ様式期)と弥生終末期(庄内式期)の移動が顕著であること、生駒山西麓と三島地方の二地域間で土器の移動が相互的に行われていることを指摘し、移動した土器の器種および出土量から以下の4類型を提示した。^(注8)

移動A類型—壺・鉢など貯蔵形態の土器が動く場合。移動は相互的であるが、搬入比率は1～3%と少量である。

移動B類型—壺・甕・高坏・鉢など多くの器種が動き、煮沸形態の土器や紡錘車などの生活道具を含む場合。搬入比率が5～10%に達することもある。

移動C類型—容量30前後の中河内産の規格甕である庄内甕の移動。煮沸効率の良い甕に限っての広範囲にわたる移動である。

移動D類型—他地域産の土器が墳墓へと供献される、もしくは、土器棺として使用される場合。

そして、A類型については相互の交易行為を想定し、土器の内容物が交換された可能性が強いとし、B類型に対しては生活を彼の地において営む目的による人間そのものの移動を想定した。また、C類型については土器自体の商品としての成立を想定し、D類型に関してはB類型に包摂される可能性を考慮しつつも、墳墓との関係を強調するためにあえて分離している。

秋山浩二氏は、乙訓地域における生駒山西麓産土器の集成を通してその搬入形態を時期別に概観し、両地域間の関係を考察している。そして、各時期の特質として、弥生前期には壺・甕などの多くの器種が動いており、その背後には弥生文化の根幹をなす農耕技術を体得した人間自身の移動・移住を想定している。また、中期においては特定の器種に限られる移動へと変化し、従前のような多地域間の交流は寸断され、閉鎖的な関係が構築されたものと想定している。しかし、このことは、地域間の関係に変化をきたしたことに起因

しており、決して交流が途絶えた訳ではないとしている。後期に関しては、後半期になるとまた前期のように多くの器種の移動が見られるようになり、集落動向と合わせ、人間交流の再活発化が引き起こされたものと想定している。

森岡秀人氏は、土器の移動を現象的に説明することと、それに集団関係を整合させて意義づける操作と作業の重要性を強調し、土器の移動を目的、距離、量等の多様な属性において詳細な分類を行っている。^(注10)

土器の地域差を明らかにすることは、その編年とともに最も重要な作業のひとつであり、これはある限定された地域内に於いて、土器の上に表れた差異の発するところが地域の差異によるものであるのか、または時間の差異によるものであるのかを誤認することを避けるためでもある。もし、この作業を十分になし得なければ、同一地域における時期の異なる土器群を、同一時期におけるそれぞれ異なった地域の土器として、または、その逆として同一時期におけるそれぞれ異なった地域の土器群を、同一地域における時期の異なる土器として捉えてしまう過ちを犯すことも有り得る。さらには、同一の時間軸の上においてそうした地域差を捉えることは、いかなる地域間において人々の交流が行われ、土器が移動したのかを解明するための前提作業でもある。

土器の「地域的様式差」の認識作業を行うためには以下のような分類をする必要があるであろう。

- a. 在地系土器：前様式から系統的に、あるいは、それを基盤に創出された土器群
- b. 外来系土器：その系譜が在地には求められず、他地域から持ち込まれた土器群
 - b I. 搬入品：単発的に他地域から持ち込まれた土器
 - b II. 模倣品：これらをモデルに在地で製作された土器
- c. 受容土器：他地域に系譜をおくものの、独自の解釈のもとに在地化した土器群
- d. 折衷土器：在地的属性と外来的属性が一つの器物の上に具現化された土器群

また、「地域的様式差」を認識する際に用いられる指標としては、同時期と見做しうる様式内における特定器種の存否、あるいはその構成比、さらには施文原理や調整手法などが挙げられる。^(注11)

上記のような指標に着目した地域色(ここでは「地域的様式差」と同様の概念として扱う)を認識する研究は、佐原 真氏の研究^(注12)を嚆矢としており、氏はその一連の研究において、近畿地方の弥生土器の地域色は、前期末に現れはじめ、その後、第Ⅲ様式期にはほぼ旧一国単位で見られるようになるが、大きくは南部(簾状文)と北部(突帯文)に二分されることを指摘している。そして、現在ではさらに細かな地域色が認識されるに至っている。また、都出比呂志氏は、地域色には大小のレベル差があり、その地域色の小単位は大きな地域内部

において、「土器の製作技法や施紋原理などにおいて、ある一本の境界線を境にして互いに排他的に拮抗する関係にある」^(注13)のではなく、共通の技術伝統に立脚した社会の中における技法等の部分要素の量的な差と捉えた。そして、土器製作者を女性と想定する観点から、この大きな地域色によりまとめられる小単位の併立を基本的な地域の紐帯関係によって規定される通婚圏^(注14)の反映と考えている。しかし、上記の研究は、いずれも同一の様式圏である大地域内における小地域間での移動を扱ったものであり、他地域からの真の意味での外来系土器を扱ってはならず、同一土器圏内における地域的偏差の分析というレベルを越えるものではない。このことは、弥生時代において畿内地方が、先進的な文化を担う一地域として存在していたこと(情報の受信者としてではなく、発信者としての性格が強く、他地域からの影響により、それまでの文化伝統を捨て去ることがない)に起因するものであろう。また、上野佳也氏は、縄文土器型式の伝播を通して、勝坂式の分布圏と押形文・爪形文の分布圏の広がり^(注15)の差が時期差を考慮したうえでも大きすぎることから、この分布圏は全て通婚圏とは考えられないとし、土器を「交易品で、独自の交易網をもっていた」ものと想定して、土器型式圏は「通婚+交易」^(注16)の範囲であるとした。このことは、決して隣接しない遠隔地間においても、商品として優れたもの(それが土器単体であるのか、若しくはその内容物の容器としてであるのか判断は難しい)ならば移動し得るということを示唆している。しかし、この場合には、あくまでも移入された土器は客体としての在り方しか示さないものと考えられ、外来系土器として抽出される性格のものであろう。また、土器分布圏を「土器の製作にかかわる情報と観念が、およびかつ受容されることが保証されたコミュニケーション・システムの範囲」^(注16)と捉える田中良之氏は、これが相互に閉鎖的な関係にある、いわゆる「ハイレベル」な様式間の伝播において、

「在来系優位→在来系・外来系拮抗(セットをなして併存)→外来系優位」

という推移を遂げる一つのモデルを提示している。

このように異なった土器様式にある地域間において、在地系から外来系が優位になって行く過程については、両者が拮抗するモデルのほかに、在地系要素のみの土器、外来系要素のみの土器、中間的な土器が優劣なく様式を構成するモデルや、在地系、外来系要素が融合した中間的な土器が主体を占めるモデル等^(注17)が提示されており、土器の製作において、在地の規制、伝統が動揺を見せ、やがてそれが外来の規制へと交替して行く様相にも様々な形があることが理解できる。そして、この様式が揺らぐ段階においてこそ、折衷土器、及び受容土器が創出されることとなり、これらを分析することにより、影響を与えた地域と、それを受けた地域の関係をうかがうことが可能となるものと思われる。

2. 京都府内における外来系土器の展開

京都府において、外来系土器として早くから認識されているのは、近江からもたらされた土器に関してであり、これまでにいくつかの論考が発表されている。

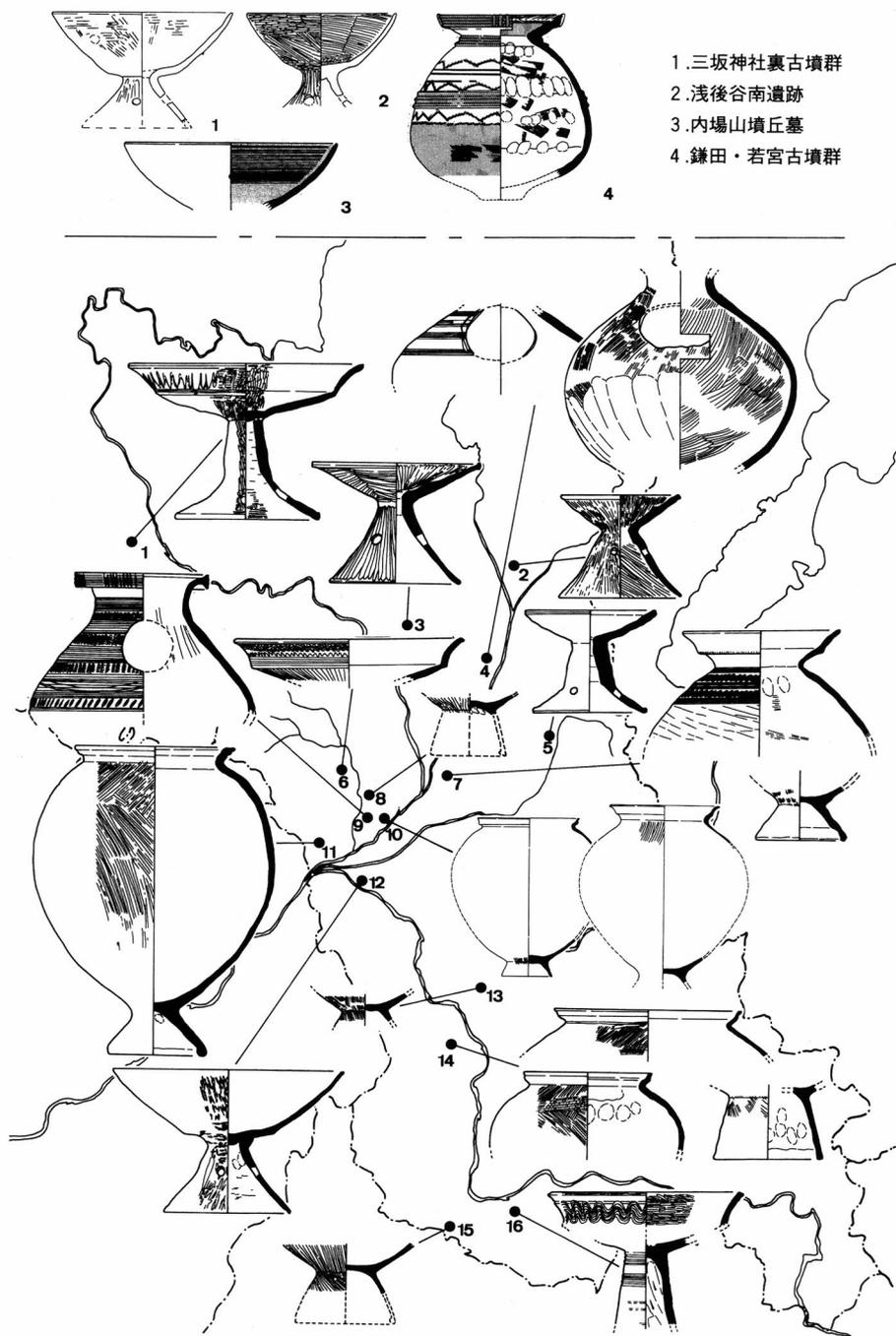
石井清司氏は、北金岐遺跡の調査に際し、全出土土器における近江系土器の比率に関し、他地域における遺跡との差異を比較検討し、資料操作の問題点を指摘しつつ、北金岐遺跡の特殊性を導き出している^(注19)。

また、國下多美樹氏は、その論考の中で弥生時代中期における乙訓地域での近江型甕の分析から両地域の交流関係を考察している。土器の移動は「生活を営む目的で動いた人間たちの移動」に起因するものと考え、後期段階においては乙訓地方が他地域への近江的要素を伝播する際の中心的役割を担ったものと結論づけている^(注20)。また、府内全域の様相を概観し、丹後地方においては確実な搬入品が認められず、僅かに折衷型甕が存在することから「人間の移動の領域外」であるとし、南丹波地域は中・後期を通じて近江系土器、折衷型土器が多く見られることから頻繁な交流関係を想定している。この2者の中間に位置する北丹波地域に関しては交流の北限とし、両者の「中間の様相」を呈するとしている。山城地域に関しては、後期後葉になるとそれまで維持されていた小地域差が崩壊し、ほぼ全域に分布域が広がる^(注21)としている。

以下では府内において少量ながら出土が確認された東海系土器の在り方について概観することとしたい。

出土が確認される東海系土器には、有段高坏、東海系器台、S字状口縁台付甕形土器(以下S字甕)、加飾壺(パレススタイル壺、柳坪型壺を含む)等がある。

京都市長刀鉾町遺跡^(注22)、長岡京市雲宮遺跡^(注23)において円窓付壺形土器が出土している。長刀鉾町遺跡では2点が報告されており、溝から出土した1点は、胎土・焼成・調整手法が在地品とは異なることから搬入品の可能性が示唆されており、包含層から出土したもう1点の壺は在地の土器に円窓という東海的要素が採用された折衷土器である。雲宮遺跡出土例は包含層から出土しており、体部に施された横線文・刺突文を繰り返す加飾パターンから東海系の要素が看取される。いずれも畿内第IV様式の範疇でとらえられるものである。京都市内では、中臣遺跡第67次調査^(注24)において、平面五角形を呈する竪穴住居跡から、いわゆる東海系器台と肩部に櫛描の波状文と横線文を施す二重口縁壺がそれぞれ1点ずつ出土している。また、和泉式部町遺跡^(注25)では、竪穴住居跡から近江系土器に混じって東海系器台が1点出土している。岡崎遺跡^(注26)では、自然流路跡から東海系器台が1点出土しており、受け部の端部外面には波状文が、脚部の端部上面には刻み目が施されている。植物園北遺跡第13次調査^(注27)においても特殊ピットから東海系器台が1点出土しており、外面と受け部内面は



第1図 東海系土器の分布(土器はS=1/8に統一)

- | | | | | |
|-----------|-------------|------------|-----------|----------|
| 1. 南金岐遺跡 | 2. 植物園北遺跡 | 3. 和泉式部町遺跡 | 4. 長刀鉾町遺跡 | 5. 中臣遺跡 |
| 6. 井ノ内遺跡 | 7. 鳥羽離宮跡 | 8. 鴨田遺跡 | 9. 雲宮遺跡 | 10. 水垂遺跡 |
| 11. 百々遺跡 | 12. 木津川河床遺跡 | 13. 森山遺跡 | 14. 大切遺跡 | |
| 15. 曾根山遺跡 | 16. 燈籠寺遺跡 | | | |

丁寧^(注28)に磨かれている。第16次調査^(注29)においても数基の竪穴住居跡から同様の器台が数点出土している。長岡京市井ノ内遺跡^(注30)では川跡から高坏が1点出土している。皿状の浅い坏部のみの出土であるが内面を丁寧^(注31)に磨き、外反する外面に波状文と横線文を施文するのは山中様式の有段高坏に通有的に見られるものである。また、木津町燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡^(注32)から出土した高坏も緩やかに外反する坏部外面に波状文を施しており、また別個体の可能性が高いが、同地点から出土した脚部も脚柱部に3～4条一単位で横線文を施しており、これも山中様式の特徴の一つである。亀岡市南金岐遺跡^(注33)で出土した有段高坏は完形品に近く全体をうかがい知ることのできる良好な資料である。京都市下鳥羽遺跡^(注34)では廻間様式期の有段高坏と体部上半に波状文と横線文を施した加飾壺が、八幡市木津川河床遺跡^(注35)でも廻間様式の有段高坏が出土している。京都市水垂遺跡^(注36)、向日市鴨田遺跡^(注37)、城陽市森山遺跡^(注38)、木津町曾根山遺跡^(注39)、京田辺市大切遺跡^(注40)からはS字甕が出土している。水垂遺跡では2点、大切遺跡では3点が確認されており、大切遺跡例は搬入品の可能性が高いと考えられる。また、鴨田遺跡、森山遺跡、曾根山遺跡では脚台部の一部が出土したのみであるが、その特徴的な形態、調整技法からもS字甕と考えて間違いないであろう。京都市鳥羽離宮第72次調査^(注41)では溝から柳ヶ坪型壺、宇田型甕の脚台部が1点ずつ出土している。大山崎町百々遺跡^(注42)においても竪穴住居跡から宇田型甕が1点出土している。

以上、悉皆的に全てを例示することはできなかったが、亀岡市以南の地域においてはおおむね東海系土器の存在が確認されており、その時期も弥生時代中期から古墳時代中期にまで及ぶことが理解できた。

また、出土例はいまだ稀少であるが、丹後地域においても近年、東海系土器の出土が報告されている。大宮町三坂神社裏古墳群^(注43)の10号墳からは廻間様式期の有段高坏が出土している。また、網野町浅後谷南遺跡^(注44)でも、祭祀に関連すると考えられる溝から廻間様式期の有段高坏が出土している。さらに周辺地域に視野を広げると、豊岡市鎌田・若宮古墳群^(注45)でもパレススタイル壺が出土している。

これらは、いずれもが墳墓または祭祀に関連すると考えられる遺構からの出土であること、パレススタイル壺や高坏といった祭祀に関係する器種に限られていること、土器の移動が線として捉えられず遠隔地における点的な在り方しか示さないことなどから丹後地域と東海地域との関係を考える上で非常に示唆的である。

おわりに

近畿地方への東海系土器の流入経路としては濃尾平野を南下し、伊勢から伊賀を經由して大和盆地へと至るルート^(注46)が考えられる。纏向遺跡や、最近の調査で大量の東海系土器が

出土したと報じられた伴堂東遺跡^(注45)など、多くの器種が大量に搬入していることから彼の地への少なからぬ人々の移動が背後には存在しており、さらには、木津川・淀川を利用して山城地域、あるいは河内地域へとその分布域を広げたものと推察される。これは、山城地域における東海系土器の分布が木津川流域を中心に広がることから、妥当性の高いものであろう。しかし、先にも検討したように、木津川をその伝播経路の端緒として山城地域、乙訓地域、京都市域、さらには南丹波地域にまで辿れる東海の要素が、そこから先は空白地帯となってしまう、丹後地域までの伝播経路の追跡が不可能となってしまう。今後の調査によって新たに出土例が報告される可能性もあるが、現状ではその空白地帯での東海系土器の出土は報告されていない。また、亀岡市から篠山盆地を西へと抜けた西紀町に存在する内場山墳丘墓^(注46)では、坏部内面に多条沈線をめぐらせた有段高坏が出土しており、これは濃尾平野からの搬入品の可能性が高いと考えられている。このことは、山城地域から北上してきた伝播ルートは南丹波地域において西方へとその方向を転換していることの現れではなかろうかと考えられる。

つまり府内を素直に北上するのではなく、それとは別に丹後地域へと至る経路が存在しているのではなかろうか。一つの可能性として濃尾平野を北上し、湖北から若狭を経て丹後地域へとつながるルートが考えられる。これは、丹後地域において北陸系土器の出土が稀ではないこと、濃尾平野において北陸系土器の出土が少なからず知られていること、また北陸地域においてもS字甕の出土が報告されていることから十分に考えられることである。

京都府においては東海系土器はあくまでも客体としての在り方しか示していない。そうした様相の中で丹後地域と南丹波地域以南においてはその在り方が大きく異なっており、移入者としての東海系土器を携えた人々の両地域への働きかけが根本から異なることの現れと考えられる。一方は日常的な煮炊具から祭祀的色彩の濃い器種までもを含めた総量的な搬入であり、他方は、祭祀に係わる器種のみという東海の要素の選択的な搬入にとどまっている。

各々に目的を違えた人々は、それぞれに独自のルートを開拓して他地域との交流を模索し、その関係を成立させているものと考えられる。外来系土器の発信源が同じであったとしても、それを受容する側とどのレベルで交流関係を構築するかによって表出される現象は一様ではないことが今回の考察により判明した。今後は各遺跡における事例を詳細に検討することによって、その差異を発生させた背景を探ることを課題としたい。

(なら・やすまさ＝京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

- 注1 小林行雄「吉田土器及び遠賀川土器とその伝播」(『考古学』3-5) 1932
藤澤一夫・小林行雄「尾張西志賀の遠賀川系土器—西志賀弥生式土器—」(『考古学』5-2) 1932
- 注2 石野博信・関川尚功『纏向』1977
森岡秀人「土師器成立の様相・土器の交流—西日本—」(『考古学ジャーナル』252) 1985
- 注3 林部 均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学雑誌』72-1) 1986
同「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」(『考古学研究』39-3) 1992
同「律令国家と畿内産土師器—飛鳥・奈良時代の東日本と西日本—」(『考古学雑誌』77-4) 1992
- 注4 石野博信「土器の移動が意味するもの」(『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器—論考篇—』) 1993
- 注5 森岡秀人「土器移動の諸類型とその意味」(『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器—論考篇—』) 1993
- 注6 佐原 真「大和川と淀川」(『古代の日本5 近畿』) 1970
- 注7 佐原 真「4. 河内の土器」(『東山遺跡』) 1980
- 注8 都出比呂志「弥生土器における地域色の性格」(『信濃』35-4) 1983
- 注9 秋山浩三「河内からもち運ばれた土器」(『長岡京古文化論叢』) 1986
- 注10 注5文献と同じ
- 注11 都出比呂志「地域と交易圏」(『日本農耕社会の成立過程』) 1989
- 注12 佐原 真「畿内地方」(『弥生式土器集成 本編』) 1966
- 注13 注8文献と同じ
- 注14 都出比呂志「原始土器と女性—弥生時代の性別分業と婚姻居住規定」(『日本女性史』1) 1982
- 注15 上野佳也「情報の流れとしての縄文土器型式の伝播」(『民族学研究』44-4) 1980
- 注16 田中良之「磨消縄文土器伝播のプロセス 中九州を中心として」(『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』) 1982
- 注17 松永幸男「土器様式変化の一類型—縄文時代後期の東南九州地方を事例として—」(『生産と流通の考古学』) 1989
- 注18 澤下孝信「土器様式伝播の一類型—中部地方西部縄文時代後半の地域相—」(『古文化談叢』20(下)) 1989
- 注19 石井清司「第3節 近江系土器について」(『北金岐遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第5冊) 1985
- 注20 國下多美樹「近江型甕についての一試論」(『長岡京古文化論叢』) 1986
- 注21 國下多美樹「Ⅱ 近江系土器について」(『京都府弥生式土器集成』) 1989
- 注22 寺島孝一編『平安京左京四條三坊十三町—長刀鉾町遺跡—』1984
- 注23 久保哲正「長岡京左京第35次調査概要—左京六条二坊一町・雲宮遺跡—」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊) 1985
- 注24 平方幸雄他「Ⅲ 67次調査」(『中臣遺跡発掘調査概報 昭和61年度』) 1987
- 注25 辻 祐司他「43 和泉式部町遺跡」(『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概報』) 1991

- 注26 平方幸雄「27 法勝寺跡」(『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概報』) 1991
- 注27 岸岡貴英「3. 植物園北遺跡第13次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第58冊) 1994
- 注28 石尾政信「6. 植物園北遺跡第16次」(『京都府遺跡調査概報』第70冊) 1996
- 注29 岩崎 誠他「右京第235次調査略報・右京第253次調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』) 1988
- 注30 伊賀高弘「燈籠寺遺跡・燈籠寺廃寺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第64冊) 1995
- 注31 水谷壽克他「(2)南金岐遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第1冊) 1982
- 注32 辻 裕司他(『下鳥羽遺跡発掘調査概報 昭和62年度』) 1988
- 注33 黒坪一樹「6. 木津川河床遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第11冊) 1984
- 注34 木下保明編『水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊』 1998
- 注35 山中 章編『向日市埋蔵文化財調査報告書 第14集 鴨田遺跡』 1985
- 注36 城陽市教育委員会編『城陽市埋蔵文化財調査報告書 第6集』 1977
- 注37 平良泰久「考古編 Ⅲ奈良時代 七 曾根山・八ヶ坪遺跡(『木津町史 資料篇Ⅰ』) 1984
- 注38 有井広幸「大切遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊) 1993
- 注39 上村和直「第72次発掘調査」(『鳥羽離宮調査概要』) 1982
- 注40 岩松 保他『百々遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第24冊) 1998
- 注41 今田昇一編『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』 1998
- 注42 石崎善久「(1)浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第93冊) 2000
- 注43 豊岡市教育委員会編「鎌田・若宮古墳群」(『豊岡市文化財調査報告書』23) 1990
- 注44 注2文献に同じ
- 注45 正式な報告書の刊行が為されておらず詳細に関しては不明である。
- 注46 中川 渉『内場山城跡』 1993